

## スポーツ医・科学Q & A

(その43)「総合型地域スポーツクラブのモデルと言われるヨーロッパの地域スポーツクラブについて教えてください」藤井 雅人

総合型地域スポーツクラブ(以下総合型クラブ)といえは一般的に、スポーツ種目、世代・年齢、技術レベルの多様性を備えていて、活動拠点となるスポーツ施設を中心に、会員である地域住民のニーズに応じた活動を質の高い指導者のもとで展開するクラブがイメージされています。そして、この総合型クラブには、地域住民による主体的なクラブ運営や、クラブの活動を通じた地域社会の活性化への期待も寄せられています。近年様々な施策によって総合型クラブの普及は進んでいますが、その一方で会員や指導者といった「ヒト」、会費や補助金といった「カネ」、施設や用具といった「モノ」などの面から、総合型クラブの活動展開には少なくない困難が生じてきているようです。

この総合型クラブのモデルといわれるのが、ドイツをはじめとするヨーロッパの地域スポーツクラブ(以下クラブ)です。クラブ先進国といわれるヨーロッパ諸国では、先に指摘した日本の総合型クラブのような問題は見られないのでしょうか。以下ではドイツを例にして、そのクラブ事情を簡単に紹介<sup>注1)</sup>、そこから日本の総合型クラブの活動展開への示唆を探ってみたいと思います。

まず確認しておきたいことは、実はドイツのクラブの主流が、私たちがイメージするような総合型クラブであるとは必ずしもいえないという点です。このことは、ドイツのクラブの約70%が会員300人以下の小規模クラブ<sup>注2)</sup>であり(図1)、そのうちの約80%が単一種目クラブであるというクラブ調査の結果に示されています。そして、小規模な単一種目クラブほど、プログラム提供が成人男性だけに限定されやすい傾向にあります。つまり、そうしたクラブでは、青少年、女性、高齢者、障がい者などを対象とするプログラムが十分に提供されていない状況にあるということです。ただし、こうしたクラブ数という観点ではなく、クラブに会員登録している人数、つまり会員数という観点でドイツのクラブ全体を眺めてみますと異なる状況が確認できます。それは、ドイツの全クラブに登録している会員数全体に占める、301~1,000人以下の中規模クラブおよび1,000人超の大規模クラブ会員の割合が、クラブ数で圧倒する300人以下の小規模クラブよりもはるかに高いということです(図2)。この中・大規模クラブは、前述した小規模な単一種目クラブとは対照的に、複数種目クラブであり、多様な対象者にプログラムを提供する傾向にあります。

以上のことから、ドイツのクラブの現状として次のような指摘が可能です。つまり、クラブ数という面では小規模(しかも単一種目)クラブが圧倒的多数を占めるという一方で、クラブに所属し活動している会員という面では中・大規模複数種目クラブがはるかに多いという点です。このことは、私たちが抱いている「ドイツのクラブ=総合型クラブ」というイメージが必ずしも正しいわけではなく、実は小規模単一種目クラブと、私たちの総合

型クラブのモデル像と合致するような中・大規模複数種目クラブとが、それぞれの役割に応じてうまく棲み分けしているような状況を示しています。こうした棲み分けは、それぞれのタイプのクラブが相互に補完するような特徴を有していることから生じてきています。例えば、小規模クラブでは、互いの顔が見える関係を築きやすいことから会員同士のつながりが強くなり、クラブの活動も活性化し、そしてクラブ運営に主体的に、ボランティアの形で取り組む会員が多くなります。さらには、そうした人的資源の活用によりクラブ運営のための人件費が節約され、結果的にクラブ会費の抑制につながります。ただし、会員規模の大きなクラブが複数種目について幅広い対象者のために多様なプログラムを提供しやすいのとは対照的に、小規模クラブでは人的資源の限界もあって、限られた種目の限られた対象者向けのプログラムを、十分な力量を有しているとはいえないような指導者のもとでしか展開できない場合も見られます。一方で、会員規模の大きなクラブでは多くの会員を対象とするそのプログラムの多様性ゆえに、会員同士の密なつながりがあまり期待できず、各会員はいわゆるプログラムの「消費者」として行動しやすくなります。それは、会員のクラブ運営への積極的な関与を減少させ、結果的に専門指導者の雇用を不可欠にし、それに伴う人件費の増大と会費の高額化を招くこととなります。つまりは、小規模クラブの会員が、会員同士の強いつながりの中でクラブとの一体感を感じながら活動することを重視している一方で、規模の大きなクラブの会員は、会員同士の密な関係やクラブへの帰属感情よりもむしろ、自分にあったプログラムを多様なプログラムの中から選び取り消費的に活動することを優先的に考える傾向にあるといえるでしょう。小規模クラブと会員規模の大きなクラブは、まさに機能的に表裏の関係にあり、ドイツのクラブシステムの中で相互補完的に機能しているように見えます。

こうしたドイツの状況を踏まえた上で、改めて冒頭で述べたような日本の総合型クラブの特色を考えてみますと、それがドイツの小規模および中・大規模クラブのそれぞれの長所の両立を目指していることが分かります。つまり、小規模クラブに顕著な、会員同士の連帯感に支えられたボランティアでの主体的なクラブ運営活動と、中・大規模クラブに特徴的な、幅広い対象者に対する多様なプログラム提供との両立です。その成功の鍵はやはり、力量あるボランティア指導者をいかに多くクラブ運営に登用できるかにあるように思います。そのためにはまず、指導者育成施策をより幅広い対象者にまで拡大実施し、相応の力量を備えた指導者をより多く生み出すこと、そしてそうした中から、ボランティアで活動する指導者を、その総合型クラブのプログラム展開に応じて円滑に供給できるようなシステムを確立することが必要でしょう。ドイツの例からも示唆されるように、クラブをボランティアで支える人的資源が多ければ多いほど、クラブ運営に関わる人件費を抑え、会費の高騰を阻止しつつ、多様なスポーツ提供が可能になると考えられます。

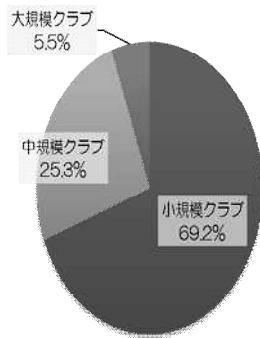


図 1 クラブ総数の規模別割合

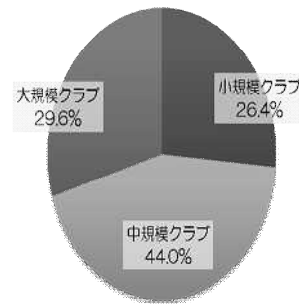


図 2 所属会員総数の規模別割合

注 1) 詳細は、藤井雅人ほか「変動期にあるドイツのフェラインスポーツ フェライン規模の分極化とその出現背景」『福岡大学スポーツ科学研究』35 (1), 2004, pp. 11-30. を参照下さい。



注 2) ドイツのクラブ調査では通常、1 つのクラブあたりの平均会員数にほぼ相当する会員 300 人以下のクラブが「小規模」と規定されています。